

アフリカの大学による基礎教育開発に資する自立的研究への支援

— ウガンダにおける事例 —

Support to the Research of African Universities for the Development of Basic Education

— Case Study in Uganda —

小澤大成*・小野由美子**・近森憲助***・喜多雅一****

Hiroaki Ozawa, Yumiko Ono, Kensuke Chikamori, Masakazu Kita

*鳴門教育大学教員教育国際協力センター, **鳴門教育大学言語系(国語)講座

鳴門教育大学総合学習開発講座, *岡山大学教育学部

* International Cooperation Center for the Teacher Education and Training, Naruto University of Education

** Language Education (Japanese), Naruto University of Education

*** Basic Human Science for Integrated Studies, Naruto University of Education

**** Faculty of Education, Okayama University

Abstract : The quality of basic education is one of big challenges in developing countries. We are providing Lesson Study activity for school-based INSET to researchers of African counties. We had a workshop for researcher and workshops for schools in Uganda, 2007. Lesson Study was accepted very well because of our strategy for dissemination.

キーワード : ウガンダ, 基礎教育開発, 授業研究, 国際教育協カイニシアティブ, 教員研修

1. はじめに

アフリカ・アジア大学間対話プロジェクト(以下 AA-Dialogue)は、広島大学教育開発国際協力研究センターが行っている、アフリカとアジアの大学・研究機関間の対話と協力を通して、研究と省察の機会を提供し、アフリカの基礎教育開発において自立的アプローチを促進するプロジェクト¹である。当プロジェクトは2005年から開始され、各年にサブサハラアフリカ4カ国より、教育行政関係者と大学関係者が選ばれ、アジアの教育機関および日本での研修を通じて、自国の基礎教育開発に資する研究を計画・実施している。

文部科学省拠点システム構築事業「国際教育協カイニシアティブ」の活動の一つとして2006年度より行われている「サブサハラアフリカ諸国の教育改善」は、主としてこのアフリカ・アジア大学間対話プロジェクトの

枠組を基に、サブサハラ各国の教育開発を支援する試みである。鳴門教育大学は「授業を中心とした校内研修の導入による初中等教育の質的向上」という活動テーマで、この事業に参加し、参加研究機関である南アフリカ、ウガンダ、エチオピアの大学と共同して活動を行っている。本稿はウガンダにおける支援について報告する。

2. 途上国における授業研究による質向上の可能性

教育の質向上は、その量的拡大とともに重要な開発課題になっている。教員の資質は教育の質を決定する重要な要素の一つであり、教員にたいする研修は教員の資質向上を図る重要な手段である。行政機構によるトップダウン型の能力開発と同時に、学校現場に根付いたボトムアップ型の研修が質的向上にかかせないものである。

授業研究は学校現場における教員研修活動の一つと

して日本で始まったものである。授業研究の形態はさまざまであるが、教員が自己の授業を他の教員に対し公開し、その後で検討会を行い、授業に対する議論を通じて実践力を向上させるという特徴は共通している。授業研究は特別の資源も必要せず、途上国で一般に困難である教員の移動を伴わず校内で実施する事が可能であるため、資源の乏しい途上国の学校現場で実施可能な活動である。JICAの教育支援プロジェクトでも重要なコンポーネントの一つとして取り入れられ、フィリピン、南アフリカ、ザンビアなどで実践されている。

鳴門教育大学の「国際教育協カイニシアティブ」の活動である「授業を中心とした校内研修の導入による初中等教育の質的向上」は、南アフリカにおける中学校理数科への授業研究の導入実績²をもとに、サブサハラ³の諸国に拡張しようというものである。

3. 授業研究ガイドライン

授業研究の経験を持っていない教員に対して授業研究を導入する際に直面する大きな困難は主として二つある。一つは教員が授業を公開した経験がなく、自分の授業を他の教員に見せるのに躊躇する事、もう一つは、検討会の場で授業に対する議論を行う際、授業に対する批判や授業者に対する個人攻撃が主な内容となり、真の目的である授業を向上させるための建設的な意見交換が行われず授業者のやる気をそぐ事である。これらは南アフリカにおける授業研究導入時にも見られている³。

この経験に基づき、「国際教育協カイニシアティブ」の活動の一環として校内研修のための指針を示す「授業研究ガイドライン」⁴を平成18年度の活動を通じて作成した。この指針は、(1)授業研究とは何か (2)授業研究の目的 (3)授業研究による利益 (4)授業研究の過程 (5)授業検討会の手順 (6)授業研究の教員研修活動への応用、から構成されている。そして序論である(1)授業研究とは何かにおいて「授業研究は教員に対する評価を行うものではなく、教員同士の継続的な学び合いにより、教員として成長していくものであり、互いに対する尊敬が重要である事」を述べている。また(4)授業研究の過程および(5)授業検討会の手順において、授業検討会が授業者にとって利益があるものとなるよう、「授業の良かった点を最初に指摘する」「授業の中で見いだされた課題を指摘する際は、それに対する改善提案と共に指摘する」としている。

4. ウガンダの大学教員による研究計画

ウガンダの参加研究機関はMakerere大学およびKyambogo大学である。ウガンダチームは、両大学の教

員、教育省職員、教員養成校教員、および初等学校教員から構成される。彼らが策定した研究計画テーマは、「ウガンダの基礎教育支援に資する大規模学級における教授と学習を向上させる戦略」である⁵。研究計画は、(1)文献レビューによる大規模学級における課題とそれに対する方略の把握 (2)ウガンダにおける大規模学級の課題と教員の対処戦略の把握 (3)教員同士の省察と共有、そして新しい戦略による授業向上の試み(4)ワークショップを通じたグッドプラクティスのより広範な共有、から構成される。高学年となると卒業試験対策に力点がおかれるため、授業向上の取り組みがしやすい卒業試験にまだ時間がある第3学年を対象学年として選んでいる。また対象科目としては基礎的な力である読み書きに関連するという理由で、算数および英語としている。対象学校は、カンパラおよびその近郊であるワキソ地区の20校(生徒教員比率80/1~120/1)でベースライン調査を行い、その中から選んだパイロット学校においてアクションリサーチを実施する。

パイロット学校において同定した効果的な戦略を他の教員に普及するための方法としてウガンダチームが考えたのが授業研究である。彼らは2006年のAA-Dialogueに伴う研修において、インドネシア教育大学で授業研究を体験しており、研究計画はその体験を核に立てられた。しかし研究チームの一部しか授業研究を体験していないため、そのウガンダにおける実践には支援が必要という判断で、AA-Dialogueをコーディネートしている広島大学を通じて鳴門教育大学へ授業研究に関する支援が要請された。

5. 鳴門教育大学による支援

2006年8月に、鳴門教育大学の研究者がウガンダを訪問し、現地チームとの話し合いに基づき、支援の大枠を決定した。そして2007年3月鳴門教育大学および岡山大学の研究者がウガンダを訪問し、授業研究に関する支援を行った。

2007年3月に行った支援は、ウガンダ側研究チームに対する授業研究ワークショップおよび、パイロット初等学校2校における授業研究ワークショップである。

(1) ウガンダ側研究チームに対するワークショップ

ウガンダ側研究チームに対するワークショップは、以下の手順で行った。①ブレインストームによるウガンダ初等学校における課題認識②授業研究の特徴の概観③南アフリカ中学校教員による授業ビデオを用いた授業観察および検討会体験④学校現場における授業研究の詳細である。

ウガンダ側研究チームにより認識された初等学校に

表1 ウガンダの初等学校における課題

・一学級当たり 80 人超という生徒数の多さ
・教科書、指導教材、学習教材といった資源不足
・教員の教授技術不足
・教員の士気がふるわない
・教員のやる気が不足している
・教員の個々の生徒への配慮が足りない
・教科内容が多すぎる

おける課題を表1に示す。おおむね途上国で共通に認識される課題が取り上げられている。これらの課題のいくつかは教員の資質向上により対応が可能であり、授業研究を行う事で期待される授業力向上により改善が期待できる事を確認した。次に「授業研究ガイドライン」を用いて授業研究の概要を説明した後、南アフリカ教員の授業ビデオを用い、授業の観察に基づく授業検討会の開催について体験的に学習してもらった。観察してもらった授業は、高校2年生に対する数学の授業で、同一教員が南アフリカの勤務校において授業を行っているものである。この教員はJICAによる研修である国別研修「理数科教員養成者研修」に参加し、その一部である鳴門教育大学における4週間の研修において密度濃く授業研究を体験している。授業1は、研修前の授業を、授業2は研修後の授業をそれぞれ異なる学級において実践した様子を収録したものである。

研究チームは、「授業研究ガイドライン」に従い、授業観察後に授業者に受け入れられるよう授業検討会におけるコメントを考えた。そのコメントを表2および表3に示す。授業1および授業2の優れた点および改善すべき点について、コメントがなされている。特に授業1において「科目内容をよく理解している」「発声が良く聞き取れる」「服装が適切」など、授業者に改善提案が受け取られるよう良い点を努力して見いだしている点が注目され、当方の意図が十分に伝わっていると判断される。「どちらの授業がより改善されているか」という問いについては全員が授業2と回答した。研究チームの確かな授業観察眼が示唆される。

次に日本における授業研究の様々な形態を紹介し、その後ウガンダでの授業研究の実施に関する議論を行った。研究チームは「いかに現場で時間を確保するか」を課題としてあげ、日本側から「土曜日にエクストラの授業を行う」などの日本での実践例を挙げた。

ワークショップに対する評価は、「授業研究を良く理解した」「ウガンダと日本の教育状況の共有ができた」

「ウガンダにおける授業研究の適用について実際的な助言が得られた」「学校現場でぜひ実践したい」と好意的なものだった。

表2 授業1に対してのウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・教員は科目内容を良く理解している
・発声が大きく良く聞き取れる
・適切な服装をしている
・自分に自信を持っている
・黒板を分割して板書を行った
・学級に規律が保たれている
課題と改善提案
・教師中心の授業である。もっと生徒を参加させると良い。
・発言および板書の速度が速すぎる。生徒のペースにあわせると良い。
・常に教室の前に位置している。適宜位置を移動すると良い。
・板書。計画的に行うと良い
・質問。質問が理解されない場合、言い換えを行うと良い。
・教授を助ける教材を用いると良い。
・黒板の方を向いて話している。生徒の方を向いて話すと良い。
・学級全体に対し話している。もっと個々の生徒に語りかけると良い。

表3 授業2に対してのウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・様々な教授を助ける教材を用いている。
・教える速度が適正である。
・明確な言葉および図による指示を行っている。
・科目の内容を理解している。
・活動が取り入れられている。
・生徒の何人かが授業に参加している。
・自信を持っている。
・教室内を移動して指導しようとしている。
・板書が計画的に行われている。
課題と改善提案
・学級の把握が不十分である。もっと把握すべき。
・生徒をもっと参加させると良い
・模造紙で示した図の文字色を見やすくすると良い。
・生徒が使う教材をもっと用意すると良い。
・授業の導入。もっと詳しく説明すると良い。
・ユーモアに欠ける。もっと生徒を元気づけると良い。
・図をフリーハンドで書いている。道具を用いて作図すると良い。

表4 第1校目 算数授業に対するウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・自信を持っている。
・授業案に従っている
・教員は生徒を良く知っている。
・生徒が授業に参加していた。
・ジェンダーについて考慮されていた。
・生徒中心型の活動だった。
・実生活の事物を用いた。
・欠席者が前に書かれている事は動機付けになる。
課題と改善提案
・教員の指導がもう少し必要。
・班に直接課題を与えると良い。

(2) パイロット初等学校におけるワークショップ

次に研究チームが授業研究を導入しようとして試みていた二つの小学校においてワークショップを行った。ワークショップは①管理職および第3学年教員に対し授業研究についての簡潔な説明②ウガンダ側研究チームおよび同僚教員による英語および算数の授業の観察③授業検討会という手順で行った。授業検討会における司会は、第1校目は日本側が行い模範例を示し、第2校目ではウガンダ側研究チームが務めた。

授業を観察した学級は第1校目が生徒数123人、第2校目は130人という大規模学級であった。両校とも英語及び数学の授業を観察したが、それぞれの科目を主担当とする合計2人の教員が教室にいて、一方の教員が授業を行う際はサポートに回る、準ティームティーチングで授業が行われていた。

第1校目は、都市に位置する建物がレンガでできていた設備に恵まれた学校であった。算数では「対」の概念がトピックで、実生活に用いられる靴や瓶を用いて概念を形成させ、その後生徒の代表が例題を回答し、その後各自演習問題を解くという手順で進められた。数学と英語の合間では、生徒に拍手させる活動を行い、区切りをつけた。英語ではトピックが「天気」で、生徒に質問して様々な天気の種類を出させたのち、模造紙にかいてある文章(写真1)を読ませた。その後会話の練習を行った。最初は全体を2つのグループに分け、会話のロールプレイを行った。次には8つのグループに分け、4回のロールプレイを行った。そして最終段階では生徒のペアを何組か前によび、それぞれ会話のロールプレイを行った。

授業の後、授業教員、管理職およびウガンダ側研究チームと検討会を行った。日本側より、検討会におい

表5 第1校目 英語授業に対するウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・前時の復習から始めるのは良い。
・教授補助教材の使用
・英語の時間だが社会の内容も取り扱って総合的。
・置いておかれがちな生徒も頑張っていた。
・生徒を指名するときには戦略的に行った。
・指導段階ごとにグループのサイズを変えた。
・イントロダクションで算数の事を忘れさせた。
・良く教員が動いていた。
課題と改善提案
・会話は記憶させてやらせると良い。
・目的格が多いのは第3学年には難しい。
・新しく出る言葉はきちんと定義すべき。
・もっと大きな声で話させると良い
・教授補助教材、小さくて見にくい。大きくすべき。
・会話に違う声音を使わせると良い。

てコメントを受け入れることが容易になるよう、良い点を指摘したあと課題について対案を入れてコメントしてほしい旨指導した。このため終始和やかな雰囲気で行った。ウガンダ側研究チームは、授業を観察・分析し、良い点の指摘と的確な改善案の提案が行われた(表4,表5)。特にガイドラインに従って良い点を多く指摘して、これが和やかに進行した大きな理由と考えられる。「男女を区別なく扱っていること」、「理解度が低い生徒にも配慮して授業を行っていること」「他教科の内容を取り入れ総合的な学習とする」を良い点として指摘する事で奨励している。大規模学級の戦略として「イントロダクションの活動で学習の切り替えを図る」「生徒を戦略的に指



写真1 初等学校(都会)における第3学年英語の授業。教授を補助する模造紙を用いている。

表6 第2校目 英語授業に対してのウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・生徒が活動的だった。
・生徒を名前で呼んだ。
・男女をきちんと混ぜた。
・序数を書いたカードを順序を混ぜて提示した。
・前時の復習を行った。
・生徒に質問する際、全体への問いかけと個々への問いかけを上手く使いわけた。
・声の高低を使い分けた。
・生徒の答えを待った。
・黒板を写す時間をとる。
課題と改善提案
・板書した練習問題が見つらなかった。黒板の両側に書くと良い。
・前に出た生徒は授業に参加できなかった。
・カードだけでなく黒板も用いると良い。

名する」「教員が教室内を動き、生徒の様子を把握する」をとらえていた。提言も「班に直接課題を与える」「声の調子を変えてメリハリをつける」と具体的であった。

第2校目は、やや郊外の学校であり、建物は土の壁であった。また窓が小さく、室内はやや暗かった。最初に行われた英語では「序数」がトピックであった。最初に9人の生徒を教室外に出し、順番に教室内へ入れる。そして「1番目」、「2番目」等と書かれたカードを皆に見せ、生徒に正しいカードを選ばせた(写真2)。生徒を名前と呼んでいて、またアイコンタクトもしっかりしていた。次に序数を使った文章を作成させ、口頭で発表させた。生徒の声が小さい場合、大きくなるまで教員は待っていた。また声の高低がバリエー

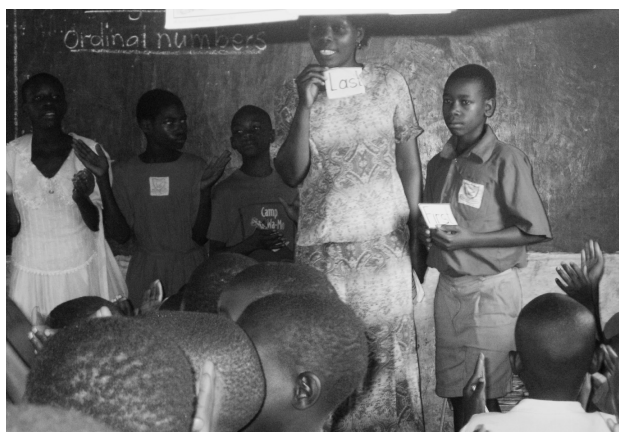


写真2 「序数」を記入したカードを用いて生徒に質問する教員。初等学校(郊外)における第3学年英語の授業。

表7 第2校目 算数授業に対してのウガンダ側研究チームのコメント

良い点
・授業の開始時に歌を歌わせた事。一気に生徒が参加した。
・グループワークを用いた。
・色々な方法で計算するよう指導した。
・男女両方の学習を推進した。
・授業が構造的だった。
・授業内容の説明が明確だった。
課題と改善提案
・時間の節約のため班のリーダーに教材をとりに来させると良い。
・班の中で良くできる生徒しか活動していない。各人に役割を与える。
・班の中で生徒に助け合わせると良い。
・班に与える問題数を増やすと良い。
・生徒に答えの出し方を説明させると良い。

ションに富んでおり、生徒の集中を促している。サポート役の教師も生徒が主担当の教師の授業に集中するよう適宜支援していた。次の算数の授業開始前に歌を皆で歌い、切り替えを上手に行った。算数では「和」の概念がトピックで、二桁の足し算を例に概念形成を行い、次に石、積み木などの「カウンター」を班に配布し、それを用いて足し算の例題の解法を確認させた(写真3)。そして生徒の何人かを前に呼び、問題を解かせる事で理解度をチェックした。次に練習問題用紙を配布し、回答させ、授業は終了した。

授業終了後、授業教員、学校管理職、同僚教員、ウガンダ側研究チームと検討会を行った。司会をウガンダ側研究チームの1人が務め、授業研究ガイドラインの手順通りに検討会を行った。ウガンダ側研究チーム

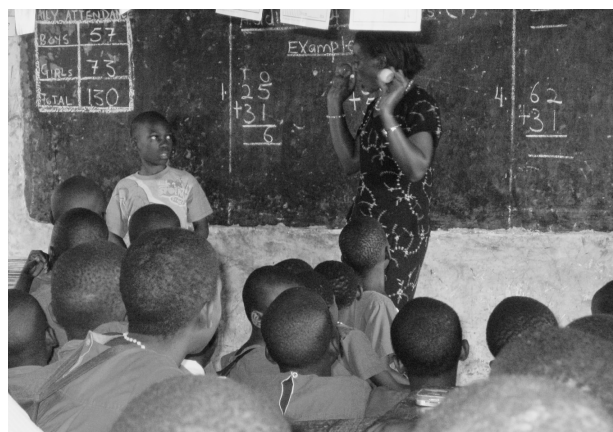


写真3 積み木による「カウンター」を用い、足し算の概念を説明する教員。初等学校(郊外)における第3学年算数の授業。

は、授業を観察・分析し、良い点の指摘と的確な改善案の提案が行われた(表6,表7)。特にガイドラインに従って良い点を多く指摘していて、これが和やかに進行した大きな理由と考えられる。「男女を区別なく扱っている」、「生徒を名前で呼ぶ」「生徒の答えを待つ」を良い点として指摘する事で奨励している。大規模学級の戦略として「歌により学習の切り替えを図る」「生徒への質問を個々へのもの/全体に対するものと使い分ける」「教員が教室内を動き、生徒の様子を把握する」をとらえていた。提言も「班の各人に役割を与え、参加させる」「班の中で互いに助け合わせる」「生徒に解答方法を説明させ、共有する」と具体的であった。第2校目では学校管理職に授業研究に対する印象を尋ねた。そのコメントは「授業研究は好ましい」「教員の恐れを取り去り、助言者と教員間に建設的な支援体制ができた」「強い点を評価され、弱点を認識する事ができる」「これからも実践してみたい」と好意的なものだった。

6. まとめ

ウガンダにおいて授業研究の導入を現地の大学教員からなる研究チームとともにいった。現地側研究チームおよびパイロット校教員の授業研究に対する受容は、南アフリカにおける授業研究導入初期の事例の事例⁷と比較して記述のように比較的好意的に受けとめられた。その要因として、当方の用意した「授業研究ガイドライン」に従って授業検討会を実施し、授業実施教員が自身の授業の良い点を最初に十分指摘されることで、観察者の課題とそれに対する建設的提言を受け入れる素地を形成できた事があげられる。ただもう一つよく見られる障害である「教員の授業公開に対する抵抗」は低く、かつ検討会で受けたコメントに対し好意的であった。これは①パイロット校教員とウガンダ側研究チームが元々師弟関係にあり人間関係が形成されていた事②授業観察者の教員養成経験が豊富で、助言が適切である事があげられる。今後の課題は今回の試行の持続性であり、継続的なフォローアップを行っていきたいと考える。

謝 辞

JICA ウガンダ調整員の岡本彩氏は、ウガンダの教育に関する背景知識を提供して下さった。記して謝意を表す。

引用文献

- 1 広島大学教育開発国際協力研究センター (CICE) (2006) アフリカ・アジア大学間対話プロジェクト—基礎教育開発のために—
http://home.hiroshima-u.ac.jp/~cice/Implementaion_J.doc
(2008,1.5)
- 2 小野由美子・近森憲助・喜多雅一・小澤大成 (2006) 南アフリカ中等理科教員再訓練計画 (MSSI) における授業研究の導入について:2000 - 2001 鳴門教育大学研究紀要, 21, 151 - 161
- 3 小野由美子・近森憲助・小澤大成・喜多雅一 (2007) 国際協力における「授業研究」の有効性—南アフリカ人教師による生物の授業を事例として— 教育実践学論集, 8, 11 - 21
- 4 Naruto University of Education (2007) Guideline for Lesson Study 平成19年度国際教育協カイニシアティブ「授業を中心とした校内研修の導入による初中等教育の質的向上」成果物
- 5 Mary Goretti Nakabugo, Byamugisha Albert, John S Maani (2006) Investigating strategies for improving teaching and learning in large classes for basic education support in Uganda. A research proposal developed at the A-A dialogue,
http://home.hiroshima-u.ac.jp/~cice/Uganda_060314.doc
(2008. 1. 5)
6. 前掲2